

第8回横手市総合計画審議会 会議録

日 時 令和7年7月30日（水）午後6時30分から午後8時50分

場 所 横手市役所本庁舎 2階 第一会議室

出席者 【委員】※横手市総合計画審議会委員名簿順

佐々木均会長、佐藤信行副会長、子野日円美委員、佐々木百合子委員、
柴田優子委員、中川義徳委員、高橋孝太委員、藤原晴菜委員、
平元沙恵子委員、嵯峨陽子委員、松井美和委員、鈴木智子委員

欠席：高橋征宏委員、織田夏雄委員、成田朋子委員、千田慎之介委員、
畑しのぶ委員、江村紘臣委員

【市】

高橋横手市長

小玉総務企画部長

大友経営企画課長、酒井課長代理、福田主査、坂元主査

概 要

1. 開会

2. 市長あいさつ

お疲れ様です。猛暑酷暑が続いており、お疲れのところ、また、大変お忙しい中、貴重なお時間を頂戴しご参集いただきましたことに、心から感謝申し上げます。

本日で通算8回目の会議となります。これまでの間、縷々ご議論をいただき、また様々なご意見も頂戴しながら練っていただいた先般の基本構想につきましては、6月定例会で議会を無事通過し、今後は基本計画という、具現化のための形を作っていく段階になりました。本当に感謝申し上げます。

現行の第2次総合計画では、「働く場が充実し、みんなが元気に暮らし続けられるまち」と、「安心して子どもを産み育てられ、みんなが笑顔で住み続けられるまち」と

いう2点を重点目標として掲げ、経済の原動力と言いますか、所得や生活の糧を勝ち取る、そういう働く場の確保というものと、やはりこの社会を持続させていくためには、子どもを産み育て、立派な社会人としてこの世の中を支えていただく子どもたちをしっかりと育てていかないといけないわけですので、この2つの柱を用意させていただいて取り組んだ10年でした。

この間、いろいろと目標を立て、その成果を具現化すべく、市民挙げて、また職員上げて取り組んでまいりました。一定の成果はあったものの、右肩下がりのトレンドというものは中々脱却するに至らず、また「人口減少に歯止めを」というような明確なスローガンもそのとおりににはなっていないということで、私自身、歯痒い思いもしておりますが、その原因というものはそれなりに分析をし、明確明快になってきているものと思っています。

つきましては、今後の10年は、今暮らしている我々が、その根本の、苦境に至らしめる原因というものをどういかにすれば改善をし、脱却をし、また自信を持って「今後も未来は明るい」とみんなが思えるような横手市の実現に向けて再度計画を練り直し、その計画をみんなで作り上げて、それを実行に移していくという、更なる10年と受けとめております。その大事なスタートとなりますので、皆様方から引き続きではありますが忌憚のないご意見を頂戴し、良いものに仕上げて、それを土台に、みんなで前に進んでいく、そういう横手市にしたいと思っておりますので、どうか引き続きよろしくお願い申し上げます。開始に当たりましての挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 会長あいさつ

皆様こんばんは。連日の猛暑というよりは酷暑ということになるかと思いますが、兵庫県丹波市では41.2℃ということで、これは国内史上最高の気温を記録したということだそうです。例年この季節、ここ数年は集中豪雨の心配をしていたかと思いますが、今年は本当に雨が降りませんで、特に農業関係の皆様は水不足で大変なご苦勞をなさっているのではないかと思います。本日は、そのような中でお集まりくださいます。ありがとうございます。なお、今日のカムチャツカ半島沖の地震ですが、まだ全国では避難をしたままという方がたくさんいらっしゃる状況かと思いますが、被害が大きくならないように祈っております。

ただ、明るい話題ももちろんありまして、なんといっても、大阪万博で横手市のかまくらが披露されていると。これは報道によりますと、東北の地方自治体では唯一というふうに聞いておりますが、横手市ここにありということで、今まで毎年大阪の方

にあのかまくらを出張展示してきたという経緯もあるのかと思いますが、関係者の皆様の心意気に拍手を送りたいと思います。

さて本日ですが、前は4月17日に第7回の審議会を行い、諮問という形であったわけですが、4月22日にはそれを受けて市長に答申書をお渡しいたしました。そして市長から今お話があったように、6月の定例議会でそれが認められたということでありまして、今日は次のステップの基本計画の方にだんだんお話に移っていると、そういうふう聞いております。

今日はそれに先立ちまして、市長からこの第8回総合計画審議会に寄せてということでお話をさせていただくことになっております。市長の並々ならぬ意欲をお聞きできるかと思いますが、それを踏まえて、後半では皆様から基本計画の策定につきまして、それぞれ忌憚のないご意見を伺ってまいりたいと思いますので、どうかよろしくお願いいたします。

4. 意見交換（今後のまちづくりについて）

事務局から

本日の流れを確認させていただきますので、お手元の資料1をご覧くださいと思います。こちらには第3次横手市総合計画の体系などを記載しております。これまでは、左側の基本構想部分を議論していただき、先日、議会の議決をいただいた形となっております。今年度につきましては、こちらの資料の右半分に記載している基本計画の部分について、策定を行うこととしております。

本日ですが、基本計画の策定を今後進めていくに当たりまして、委員の皆様による対話を通じまして、今後5年間のまちづくりで重点を置くポイントや取り組みの方針、あるいは個別の事業などについて幅広くお話をいただきまして、今後の基本計画策定の方向性を確認する会議にさせていただきたいと考えております。

意見交換の流れですが、本日は高橋市長にも同席いただいておりますので、初めに、意見交換に当たっての話題提供として、高橋市長からお話をさせていただきます。その後、委員の皆様それぞれのお立場から、今後のまちづくりに当たって必要と思う考え方や取り組みなどを自由にご発言いただきまして、意見交換という形にさせていただければと思っておりますので、ぜひ積極的なご発言をお願いいたします。なお、意見交換の進行につきましては会長にお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、こういった内容で進めさせていただきますが、まずは高橋市長より話題提供ということで、よろしくお願いいたします。

市長から

どうもお疲れ様です。これからの10年、また更に10年でこの世が終わるわけではありませので、その先、更にその先ということでありまして、願わくは永遠にこの横手市、日本が存在し続けるというのは皆が願っているはずですし、かつてこの社会を築いてくれた、礎を築いてくれた先人たちも皆同じ思いだったと思います。これから生まれてくる子たちも、次の世代に対してはそういう思いで暮らしていくんだと思いますので、1万年以上続くこの日本の歴史の中で、1万年間、2万年間共有できる部分はそういうことなのかなと思っています。1万年や2万年思いを共有できる部分は向こう10年、20年先もおそらく共有できる背骨になるんだろうということでありまして、お話をさせていただきたいと思います。

わかりやすく言うと「温故知新」です。ご存知のことと思いますが、故きを温ねて新しきを知るということでありまして、常に世の中、変化変化でありまして、その先を読んでそれに対応していくというのはなかなか難しいことです。中には、その先を読んでうまく対応し、成功を勝ち取るという人もいらっしゃいますが、私のような凡人はなかなか全てが見通せるわけではありません。

つきましては、いろいろと思い起こすことによって、そして今と照らし合わせることによって、少しはこの先々の展望というものが開きやすくなるのではないかと考えます。せいぜい私も50年しか生きておりませので、自分の中で体得した経験は50年分しかありませんが、ありがたいことに、人類はそういう自らの経験を書き残してくれていますし、自らのお考えを書き残して記していただいているということでありませ。その時代時代の困難というものがあつたわけですが、先人たちはその都度必死に知恵を絞って、その難局を乗り越えてきたということでありませので、我々社会も世知辛く、見通しが五里霧中な昨今ですが、それはもうみんなで知恵を絞って工夫し、邁進努力すれば必ずや道は開けるものと、そこは楽観的に捉えております。ただ、道を誤ると踏み外すということもありますので、そこはもう切羽詰まったこの横手市ですので、踏み外さないように着実に歩んでいける、そういう未来にしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

次のスライドをお願いします。ご存知のとおり、最大の課題と申しませうか、これは都会を含め、日本全国同じ課題だと思ひませ。一極集中で人が都会に流入しても大都会も子どもが生まれず、そしてこの横手市においてもお子さんの誕生はしばらく、また誕生したお子さんたちもしっかりと大都会に吸い込まれていくというような現象が止まらない秋田県、そして横手市です。

人口のピークは昭和30年に14万人いましたが、今は7万人台に突入しており、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、令和52年には2万8千人台となります。遙か先の話だから、自分の時代だけは何とかなると思つたら駄目なんですね。長いようですぐに来てしまうのが未来であり、何もしなければこのようになっていく現実があります。そこに抗いたいという思いもありますが、ただ、妥当な横手の人口というのはどこが落としどころなのかということそれは不明ですが、しっかり食べていけ

るというのが前提ではないかと思います。ですので、人口が少なくても少数精鋭であればいいという場合もありますし、人口が多くても烏合の衆であってはそれもまずいわけであります。多数精鋭とまではいかないまでも、まず少数精鋭、もしくは今のこの人口動態を少しでも上の方に变化させていきたいというように思っています。

さて、世界人口会議という会議がかつてありました。1972年、昭和47年です。約50数年前、ブカレスト会議という、ルーマニアの古都で国際会議が開かれました。その当時はどのような議論だったかという、人口が爆発的に増えてしまうとといったことや、すぐに死んでしまうといった内容でした。当時、国際会議で目標にした数値というのは、世界の人々の平均寿命を50歳まで引き上げましょうということでした。昭和47年、1972年に向こう1985年までの目標が、1000人中120人以下まで生まれたお子さんが死なないようにするということで、要は10人に1人以上が亡くなっていたということでした、だからそこまで平均寿命を持っていきましょうということになります。先進国はそうではありませんが、そういう時代だったということです。

今の時代は1000人中120人が亡くなるということはないですし、もっと平均寿命は上がっています。ですので、人口をどう捉えて我々は幸せに生きていくかというお話になりますが、これまで、ちょっと疫病が発生しないだとか、ちょっと災害が発生しないだとか、ちょっと不作がないだとかという運の良い瞬間が同時多発的に数年起きると、人口は増えていました。すぐに倍ぐらいに増えてしまいます。出生率が5人とか6人とか。多分2000年ぐらい前だと、健康な女性は10人ぐらい産んでたのではないかと思います。文献によるとそういう時代もあったということです。

ただ、人口の倍増に合わせて食料を同じペースで倍増させることができるかという、食料生産はそんなに簡単ではありません。食料だって不作がありますし、病気もあります。そういった意味では、人口がぱっと幸運が重なって増えてしまうということ、ある意味政治は恐れたのかもしれないかもしれません。飢え死にが一番つらいですから。食べ物が無いという究極の場面は最後行き着くところ、共食いなんですね。残酷なことを言いますが、つい最近までの人類の歴史はそういうものでした。

では、かつてこのような人口減少が存在しなかったかという、それは2000年ほど前もありました。ローマ帝国時代、パクスロマーナという、景気が良くて桁外れに発展し、我が世の春みたいな時代、都市では同じような現象が2000年ほど前から起きています。ですので、アウグストゥスという皇帝がいましたが、2000年ほど前には婚姻法というものを制定して、結婚してない人や子供を産んでない人から財産を没収したりしています。ローマは共和制で、民主主義的な政治でしたが、それでも人口減少に抗おうとして、今の我々と同じような発想で悩んで、何とかしようとしていました。ですが、結論から言うと何ともなりませんでした。

また、中国では唐の後に宋という王朝がありました。開封という首都ですが、国は弱いけれど文化と経済が強くなり、その当時では世界一の豊かな都市になりましたが、そこでもやはり豊かになると少子化になりました。ですので、どの時代のどの国家でも、経済的に豊かになると人口減少という状況、少子化という状況になるということ

です。

経済が隆盛して財産を持つと、子どもが多い場合は財産を分けないといけなくて、多すぎると相続争いもあるかもしれませんし、もしくは食べていける分の財産を得ることができずに皆がジリ貧になってしまうとか。なので、2、3人の子どもがいればそれでいいというような状況になっていきます。また、エリートという階級を目指したりすると、やはり今と同じで学問、文化教養を子どもたちにしっかり身に付けさせないと、その子らは豊かな生活、親たちと同じような生活にありつけないということで、やはり子どもへ投資を行います。それは2000年前も1000年前も隆盛の極まった都市は同じです。そして結局はそういう高所得、富裕層の方から少子化になっていくということで、結局人が足りなくなっていくことで、結末は、我が世の春だった国家が転落に向かうという歴史であります。

もう少し最近の話をすると、1500年代にポルトガルが種子島に来て、その後はスペインが日本に来ました。世界を制覇していた国の順番で日本に外国人が来ており、ポルトガルが種子島に漂着したのは世界を席卷してる最中であり、その次のスペインは無敵艦隊で世界を席卷し、その次はオランダ、その次はイギリスです。その後、アメリカのペリーが最後に日本へやって来て、今もギリギリでアメリカが世界のトップに立っています。どの国も少子化になりましたし、人口流出もありました。あちこちに植民地があり、自国よりも植民地の方が稼げるということで、稼げる方に人が移動することで人口流出し、少子化にもなっています。また、イギリスでは産業革命によって農村部から工業地帯に引き寄せられて、やはり今の日本と同じような状況になりました。

ただ、アメリカは特別ですね。人手が要るときは移民をどんどん受け入れて、要らないときは受け入れず、その調整弁を国境線で上手くやり繰りしながら、自分たちの都合の良い人口にコントロールをしています。今もアメリカはそういう方法ですけども、日本はスペインのようにもアメリカのようにもいきませんので、日本なりの工夫で生き残らないといけないと思っています。

スミス、マルクス、ケインズ、シュンペーターという4大経済学者を多分ご存知だと思いますが、いわゆる天才の部類に入る学者さんです。その中で、シュンペーターという学者は、イノベーションという革新がないと成長できないということを提唱しています。そして、シュンペーターは、「資本主義は大成功する」「大成功した後、滅びる」と言っています。どうしてかというと、資本主義は、資本を集め、合理的にスケールメリットで、そして革新に次ぐ革新で矢継ぎ早に新しいものを生み出し、量産効果で安く便利なものや魅力的なものを行き渡らせ、その経済でもって所得も得て、どんどんどんどん成長していきます。ですが、知らず知らずのうちに国民全体が合理主義になる。経済活動だけを資本主義の頭で向かっていけばいいのですが、人の生き方とか暮らしまで全部合理主義となると、「今だけ、金だけ、自分だけ」ということになってしまいます。

今でいう「コスパ」「タイパ」です。若い子たちが良く言っています。資本主義が大

成功した後は、あの方向に国民がなっていくということです。そうすると、家族を持つ、子どもを育てるということは「タイパ」「コスパ」が悪いとなります。ついては、経済社会活動以外に自分の生き方そのものも資本主義という生き方になってしまうと、それは「稼いだお金は家族を養うよりも全部自分に使おう」「時間は全部自分のために使おう」となり、それだと結婚しない方が得となります。とっくの昔に亡くなったシュンペーターは、自動的に少子化に向かっていくということを言っていました。幸か不幸か、日本はシュンペーターが言ったとおりの社会になっています。

では、資本主義を、自由主義を、平等を、民主主義を捨てられるのかというと、それは捨てる必要はありません。どこに答えがあるのかというと、私は、渋沢栄一の『論語と算盤』であると思います。「算盤勘定は大事けれども、道徳も大事だよ」と渋沢さんは言いたかったんだと思います。

渋沢さんが存在する以前から、資本主義でたくさん儲けているのに少子化にならない民族がいます。ユダヤ人です。ご存知のとおり、GAFA（ガーファ。Google、Amazon、Facebook、Apple の 4 社の頭文字を組み合わせた造語。）は全てユダヤ資本です。皆様方の所得の 2 割か 3 割はユダヤ人に行っていると思います。GAFA に Microsoft を加えた GAFAM（ガファム）の類のお金の出所はユダヤ資本です。挙げればきりが無いほど、皆様方はお客さんになっています。ユダヤ人は超資本主義です。ですが少子化ではありません。世界の人口からするとごく少数ですが、経済、ビジネスで大成功しています。

儲け続けた民族が唯一少子化になっていないというのは、それは旧約聖書を信じ学んでいるからです。いわゆる 3000 年前の道德戒律です。旧約聖書の創世記には「産めよ、増えよ、地に満ちよ」という言葉があり、子どもを産み、育て、増えていかなければいけないということを 3000 年間信仰しているので、来年になったら考えが変わるということではなく、おそらく向こう 50 年も 100 年先も、3000 年前の理念を持ちながらも、我々よりも 10 年、20 年、50 年先を考えているんだと思います。ですので、まさに「温故知新」であり、超古代的な発想と最先端の未来のハイブリッドです。その部分は少し真似をした方が良いと思っています。

ただ、我々はユダヤ教でもキリスト教でもなく、元々は儒教であったり、仏教であったり、神道であったりという、まさにインドと中国と日本の良い部分をいいところ取りして、それを生活の中に落とし込んだのが我々の道德観です。そういうことを言うおじいちゃんやお父さんはもう嫌われてしまい、そのような発想は今の子どもたちにはありません。私はそこからだと思っています。今まではそういう教えを受けた田舎の子どもたちが超資本主義の東京に行き、道德観や体力、やる気も持った子どもたちが無尽蔵に都会に供給されていたので、当然に東京は発展しました。超資本主義の部分と道德観を持った人の人材供給がうまく融合すれば、それは成功します。

ですが、いよいよ地方もカスカスになっています。「失われた 30 年」というのはなるほどと思いますし、そういう戦前を美化するつもりはありませんが、結局は、戦後のあの発展は戦前の教育を受けた人が戦後の発展をさせたことであって、戦後教

育を受けた人が戦後の大発展をさせたわけではありませんので、つきましてはそこにもう一度気付くと良いのかと思います。

仏教は先祖を大事にするので、先祖に対して感謝もするでしょうし、また、今はいくという天変地異で、渇水があったり、洪水になったり、地震があったりという、大自然への畏怖というのは神道の中に込められていたでしょうから、やはり人は一人では生きられないということであると思います。また、世の中に動乱があれば、どんな苦境でも国家に面倒を見続けさせることが出来るかと言えばそれは分からないことであり、本当は協力しながら、謙虚に生きていかなければいけないというのが、もしかしたら神道にはあったんだと思います。

唐心の中国には、仁義礼智忠信孝悌（じん・ぎ・れい・ち・ちゅう・しん・こう・てい）という言葉があり、仁は優しさ、義は正しさ、礼は礼儀作法、振る舞い、智は正しい判断を下せる能力、忠は社会に対しての自己犠牲、信は信用、孝は親孝行、悌は兄弟仲良く、親戚仲良くなどといった意味ですが、それは我々の中で、そういうことを言われていたなという記憶はあるのだと思いますが、真剣に子どもたちに語るまでにはもう今は行っていないと思います。

自分だけ、今だけ、金だけという人だけになってしまえば、てんでばらばらな人が存在しているだけの国になります。本当は1足す1が2でなく、シナジー効果で3にも4にも5にもなるというのが良い協力、協調、協和であつたりしますが、そういうシナジー効果による倍増効果が生み出しづらいことになるので、成長しづらいし家族も作られないし、子ども生まれないというようになってしまいます。ですので、理にかなった今の日本の現象だと私は思っており、今更ながらシュンペーターに教えられたというように思います。資本主義の大成功は勝ち取らないと列強諸国に飲み込まれるし、あまり豊かな生活もできないし、だけれどもそればかりを追い求めると、行き着く先は滅亡転落なので、そうならないためには渋沢さんが言ったように、それと補完する形で、古いと言われるかもしれませんが、対極にある道德観をセットにすることが必要であり、そうすれば日本はこの先も発展し続けることが出来ると思います。

ですが、片方の道德の部分は捨てて、自由と資本主義に全振りしたという形が昨今ですので、そこに早めに気がついて、我々はそうじゃない形というのを示していかなければいけないと思います。ある程度それを姿勢で、また言葉で示して、じわじわとそういうムードを日本全体に行き渡らせないと、私はこのままこうなってくるだろうと感じており、それ以外には処方箋がないのではないかと思います。

自信をもって家族は持たないという選択を貫けるということは、実は社会保障を完全に信用しているということになります。政府を完全に信用していることです。ですが、制度や政策、政府、行政に対し、不満や不信などを言っていることと思います。信用していない割には、漠然とした国家に対する安心感があり、社会保障制度によって、最終的には転落しても最低限のセーフティーネットがあるとなれば、一人でも生きていけるという自信になってしまっています。

でも、人は一人では生きていけませんので、そうした意味では、押し付けるわけではなく、いろんな生き方があっていいのですが、多少分かっていただいた上で各々が自由な生き方というものを歩んでいけば、バランスのとれた良い社会にさらに生まれ変わっていくのではないかと思います。このような現実がないと、我々は気付くきっかけもないまま過ごしたことと思いますので、これはわかりやすい現象だと思ってありがたく受け止め、我々はこれからの社会、また我々の生き方としてどう振る舞えばいいのかということを問題提起として受け止めて、今のままだとなってしまうので少しずつ変わっていこうというのを横手は示していくということも大事なんだと思います。

ただ、こんなことばかりでは明日のご飯をどうするかという現実があります。では、横手の人口が少ないから大変な状況かということ、少ない人口で横手市よりも稼いでいるところはいくらでもあります。カリフォルニア州の人口密度は平方キロメートルあたり 80 人であり、横手は 113 人です。ですので、カリフォルニア州の平均的な景色は横手市よりも田舎です。ロサンゼルスやサンフランシスコは大都市ですが、それ以外は横手よりも田舎なんです。けれども、しっかり稼いでいるということです。また、ミネソタ州は横手よりも田舎なのに、1 人当たりの所得は 1000 万円を超えています。ノルウェーやスイスもそうです。スウェーデンは少し落ちますが、850 万円ほどということで、地域の特性や強みをうまく生かして、人口が少ないながらも強い経済によって君臨している地域が世界には存在しています。ですので、今の横手では何ら勝負にならないのかということそんなことはなく、やりようだと考えます。

やはり、少ないながらも生産性を向上させて、しっかり所得を得ていくということが必要であり、そうでないと家族も養えません。ですので、これまで企業誘致へ力を集中させてやってまいりました。お陰をもちまして、工業団地で紹介できる土地がないという状況まで来れましたし、実際に民間の企業でも、市の職員よりも良い待遇で雇うことができている会社さんも横手にはたくさん進出いただいております。しかも、製造業から IT、ホワイトカラーのお仕事まで、様々な業種の企業に進出いただいておりますので、そういった意味ではこういう部分はもっともっと頑張って強化していきたいと考えております。そして、もっともっと頑張る証明として工業団地の拡張を進めており、これでもってさらに有力な企業さんを引き寄せてまいりたいと思っています。

これまで、私が市長に就任してから 24 社が誘致企業認定をされており、かれこれ新規で 1000 名を超えるような雇用が発生しています。「こういうところが雇用をどんどん引き寄せるから、うちの会社には新しい従業員が入ってこない。」といったようなお声もいただきますが、それは横手市役所も同じ状況です。そのような状態でもまだまだ人口流出は止まらないというのが横手の現状です。でも、これがなければ、この 1000 名プラスその家族というのはこの地に居なかったであまりしょうから、そう考えると来ないよりは来てくれた方が、そしてこういう企業も来た同士、また地元企業とうまく連携、連絡、協調して新しいビジネスというものが今生まれてきてますの

で、より一層良い方向にかみ合っていけば良いなと期待をしております。

また、工業だけでなく、横手市の大半を占める平場は農地ですので、農業でもしっかり食べていける、家族を養っていける、そして今風の若者にも魅力的に思っていたような、そういう強い農業、先進的な農業にも取り組んでいきたいと思えます。食料が地元で獲れるということは実は幸せなことで、安心感がそれだけであるということです。今回の米の価格上昇で、食料安保を少し意識した国民が増えたのではないかと考えていますが、飢饉や本当に食料が足りないというときはあんなものではありません。今は気温が 40 度になってしまうような社会であり、これは日本だけが異常気象ではなく世界的な規模です。食べ物の 6 割を輸入している日本ですが、6 割のどこの生産基地も天候が正常で、平年並みがずっと続くかとなればそうではないと思います。そうすれば食料基地であることの安心感というのは、実はお金には代えがたい、贅沢な環境なんだと思っています。

もちろん、それを裏付けるように政策でも支援をさせていただいており、現に先進的な農業に取り組んでいただいている農家さんが大勢います。自動運転で田んぼを耕すような農家さんも出てきていますし、先般の米の価格上昇により、16 町歩ぐらいの面積を耕作している方の売上は 2000 万円ぐらいかもしれません。下手するとおじいちゃん 1 人でそういう場合もあります。

今は機械が良く、設備投資のほかに土地の集積をした方については、それぐらいの売り上げがあった方もいらっしゃいます。今、農業者も淘汰されています。もうやらない、もうやっていけないという農家の土地を集積し、規模拡大が進んでいますので、あと 10 年もすると 1 経営体当たりの農業所得は確実に増えますので、10 年後に農業をやろうかなという人は、もしかしたら勝負になるかもしれません。もしかしたら、その一家の農業をやってるおじいちゃんが一番高額所得で、その息子夫婦は 2 人合わせてもおじいちゃんの所得に及ぶか及ばないかということもあるかもしれません。実際に、今も横手ではそういう農家さんがいっぱいではありませんがいらっしゃいます。そういう農家さんの家に行くとお子さんが 3 人、4 人いたりします。農家の家は結構大きいので、そういう大所帯のご家庭というのも強い農家では見受けられたりしますし、そういう所得を得られる資産があるんだったら継ごうかなとも思うのではないのでしょうか。ですので、何とかそういう形まで横手の農業を持っていきたいと企んでおります。

もちろん農家だけに頑張らせるわけではなく、施設整備も行っています。これはコールドチェーンと言いますが、作った農産物をすぐに冷温倉庫に入れ、良い状態を保ちながら価格が良いときに出荷するとか、物が足りなくなってきたときに強気で出荷するとか、ここで時間を稼ぎます。要は、今までは生もののため、収穫したら状態がどんどん悪くなってしまうので、価格がどうあれ出荷します。どんなに大量に獲れて価格が安かろうと、市場に出さないといけない。ですけれども、価格が生産者優位じゃないときには、わざわざ品物を出さないでここに貯蔵しておいて、品薄になって、皆がいくら高くても欲しいというときに、ここから悠然と品物を出していくという設備が

横手では整っています。しかも、米だけでなく多品目です。米だけ、リンゴだけという倉庫は全国あちこちにありますが、米であったり、花であったり、野菜であったり、いろんな産品をその産品ごとに一番良好であろう温度帯で保管しておける倉庫です。これは 22 億円で造りましたが、今造るとなると 40 億円の手前ぐらいまでになってしまふと思われまふ。決断を早く、やれるときにやってしまうと、やってよかったと後で思える場合もあります。

次に進みます。これからさらにそういう産業をこちらの方に引っ張って来ることが大事ですが、引っ張ると言っても、やはり特典が企業さん側にもないとなかなか来る理由が見当たらないということになります。つきましては、来る理由として、秋田県には再生可能エネルギーがふんだんに存在しているということをお話しさせていただきます。洋上風力の話はよく上がってきますし、東成瀬では成瀬ダム、鳥海山では鳥海ダムということで、ダムによる水力発電もこれからは見込まれます。また、湯沢には湯ノ岱を始めとした地熱、地中熱があります。要は、今のところ再生可能エネルギー自給率は 6 割ぐらいですが、あと 10 年、20 年経つと、100%、200%、300%、400%というように、二酸化炭素を出さなくて、再生可能エネルギーだけで我々の使っている電力の全てを賄えるぐらい、秋田はそういう類のエネルギーが豊富だということです。

世界で戦うグローバルな企業であればあるほど、CO2 をバンバン出して作ったような製品は買いませんよとか、そういう会社には投資しませんよとか、出資しませんよというふうになっている社会ですので、つきましては、こういうエネルギーで生産させてください、そのためには秋田に進出しないといけませんねというような流れにできつつあるということですので、私は企業誘致のネタとして、この話題もしょっちゅう使わせていただいております。

17 ページに進みます。要は、農と工商のどちらもしっかり際立たせ、発展させ、その両立のもとで成長を目指すということで、まさに田園都市という自己完結の理想の都市というものが昔流行ったりしましたが、なかなかそういう理想にはたどり着けずということで昨今あるわけですが、横手においてはそういった田園都市の姿が確立できつつあると感じています。自分たちで食べるものは自分たちで採り、また様々な仕事に就ける、そして自分たちで買いたいものは地元で買えると。それをしっかり目指して、強い横手市を築いてまいりたいと思っています。

次は少子化対策のお話しです。冒頭で、漠然とした、そういう心の問題のことをお話ししましたが、現実には、育てていく、育んでいくということは大変です。ですので、思い当たる限り、また財源の調達できる範囲の中で、他の自治体よりはいろいろ取り組んでおります。高校生までの医療費が無料であったり、また保育料が無料であったり、そうした取り組みにより他の自治体よりは頭一つ抜けている形です。部分部分によっては、もしかしたら負けている部分もあるかもしれませんが、トータルで子育て支援ということを評価させていただけるのであれば、横手市は間違いなく優れている、頑張っている部類に入ると思っています。

ただ、今のこの社会やそういう状況になかなか適応できないといいましょうか、引きこもりという問題を抱えているご家庭、そのお子さんがいらっしゃいます。横手の場合、人口に係数を掛けると 200 人ぐらいかなというようなことでしたが、アンケートをとったら 500 人ぐらいいるということで、これは見えない、我々の現実の社会問題であると受け止めております。

それはその家庭だけの問題だから、関係のない人は関係ないですよねというのは良くなく、置き去りはよくありません。そういうお子さんたちがどうしてそういう状況に陥ったのかというのは、その子ごとに違います。理由は様々ですが、その様々な理由でこういう状態に陥っているお子さんを、やはりオーダーメイドで、立ち直っていただいて社会復帰といいますか、希望の持てる、その自分の存在意義や存在価値を見出せるような、そういう道標というものを提案させていただいて、何とか 1 人でも多く、その笑顔を取り戻していただけたらと思います。

ひきこもりのお子さんがいると、家族も深刻な状況になってしまいます。ですので、深刻な状況は 500 人ではなく、その家族も含めると 1500 人や 2000 人にもなるのではないかと思います。それはもう横手市としては大打撃です。このことについては真剣に取り組ませていただいております、実際に相談窓口を Y² ぷらざに設け、専門性の高い知識やノウハウを身につけたそういう先生方が一人ひとり、オーダーメイドで対応にあたっています。これは長期戦で、特効薬というものはないわけですが、何とかしていく努力をし、データというものを積み上げ、アプローチの改善を図ってまいりたいと考えております。このことについては、横手市は一人ひとりを大事にしようとしているという姿勢であると思っただければと思います。

次は、先ほども申し上げました若者の活躍の場のお話です。もちろん楽しむ場も必要ですが、高校生や大学進学したお子さんたちは、横手にどういう会社やどういう活躍の場が存在しているのかということを、実は良くわかっていません。つきましては、そういうお子さんたちやご家庭に、しっかりこの横手の働くフィールドというものを認知いただいて、「ここだったらやっていけるかな。」「ここだったらいいかな。」と思えるような情報提供を今現在もしっかりやっておりますし、今後もやっていきます。

実際に「横手のスゴイ企業発見ガイダンス」というイベントで高校生を対象に企業紹介をすると、この会社だったらいいかなというお子さんがいたりします。もし、こういう取り組みをやらなければ、多分漠然と東京や仙台に行ってしまったかもしれません。都会に憧れることは何ら悪いことではないですが、横手でしっかり稼いで、ゴールデンウィークに東京へ遊びに行くといったようなことも、憧れを解消する方法になると思います。横手でも、東京で働く並のスキルや成長を見い出せますし、また活躍を世界に広げられる会社もあります。また、そこまで頑張らなくても、コツコツしっかり所得を稼げればいいというお子さんに対しては、そういう職場もあります。ですので、バリエーションはだんだん増えてきているということで、もっと子どもたちに知っていただいて、定着を図っていききたいと思っておりますし、また Uターンも図っていききたいと思っております。

お陰様を持ちまして、このようなガイダンスでアンケートをとったところ、「もっと知りたい企業があった。」と答えてくれた子が半分いらっしゃいました。その半分の全員がその企業に就職するかどうかは別として、ガイダンスをやらなければ、この半分の方たちもどこかへ行ってしまっていた可能性もありますので、やはり一人ひとりを大事にする横手市としては、ここで頑張るという意味のある子を取り残さないように、今後も努めてまいります。

次は、とにかく人生 100 年時代ということで、人口は減っても活躍できる世代の幅が広がれば、それはいいわけです。最後、棺桶に入るギリギリまで健康で、何らか、社会のために頑張る全市民であれば、それは別に高齢化も怖いものではないと思います。要は、そういう全世代が活躍する社会を実現したいと思っていますし、平均寿命がワーストだったとしても世界の平均寿命から比べると半分より上、偏差値 60 ぐらいです。

日本というカテゴリーで順位をつければ、1 位から 47 位まで順位はつけられますが、そもそも日本はそれなりの国ですので、国内版の順位付けでビリだからと言って悲観する必要は全くないということです。あれは、ああいう順位をつけると皆さん注目して、うちの県はビリだとか 1 位だとか、一喜一憂します。興味関心を引くという部分では良いと思いますが、そういう数字はデータとして頭に刻みながらも、その悪い数字でもってがっかりする必要はないということです。

次は高齢化率についてですが、横手市は 40%を超えています。14%で高齢社会、21%で超高齢社会ですが、約 42%の横手市の場合は、ハイパー超高齢社会とでも言うのでしょうか。特に農業者は高齢化率でいきますと 6 割を超えています。ですが、高齢者と言われる方々が横手の経済を支え、戦力になっています。これは、もし仮に横手市が生まれた以上に若者がどんどん流入してくる、提供できる雇用以上に入ってくるような市であれば、若者たちはこの人たちのせいで自分たち若者の活躍の場が奪われるので、早くどいてくださいと言います。ですが、今横手の会社はそういう会社ではありません。上場企業の大手でも、70 歳とか 75 歳の方が若者と一緒に普通に働いています。要は、若者の雇用を高齢者が脅かすということは全くないということです。

私がいいなと思ったのは、70 代のいわゆるおじいちゃん世代と 20 代の新入社員に毛が生えたぐらいの、要は孫とおじいちゃんぐらいの年齢差がある二人が同じ仕事に取り組んでいました。IT 系を扱わせると若い人たちはすんなり順応し、大先輩方は少し疎いわけですが、それ以外の部分は絶対に若者に負けていないです。

高齢の大先輩方は、それはもう自分たちで創意工夫の中、今の発展を彼らが築いてきました。向上や会社で突然何かの問題が発生したとしても、あれはこうやればいい、それはそうやればいいと言って、すぐに対策や対処の方法を思いつくのが高齢者です。若い人たちはフリーズしてしまいます。そんな硬直なんて許されない時代、「仕事は先輩の背中を見て覚えろ」みたいないぶし銀の中で育たざるを得なかった今の 60 代 70 代の方は、新しく発生した今風の問題でも難なく乗り越えようとしてくれます。その姿というのは、学校では教えてもらえない姿勢、姿です。

40代や50代の人と20代の人を組み合わせだと、多分怒ってしまうかもしれませんが、70代の社員が20代の若い社員を怒るかと言えば怒らないと思います。孫ですから。世代が近い先輩だと、反抗したり、少し拗ねてしまうかもしれません。おじいちゃんぐらいから言われると20代の子は素直に聞くという部分では、デジタル時代と超アナログ時代がうまく同じ職場で、同じ空間で一つの作業をやるという、そういうシチュエーションや空間は、東京ではあり得ないのではないのでしょうか。東京のオフィスではないはずです。この人たちは「邪魔」ですから。給料は高いけど働かないとか、早く辞めてくれればいいのになどと言われてしまいますが、人手不足というのはこういうプラスがあるということです。

そして、本来であれば大事にすべき美德やノウハウ、考え、習慣などが中々授からないまま成長してしまった若者も、そういう一世代、二世代昔の人と過ごすことによって、多分賢い子は気付いたり、そこから何かを勝ち取ったりするんだと思います。いい見本ですから。ですので、そういう空間が横手には点在しているということは、私は若い人たちにとって絶対にマイナスにはならないと思います。東京に行けば、同世代との熾烈な競争で、否応なしに鍛えられるということはあるかもしれません。それはもう、都会に行けば行くほど確実に弱肉強食です。でも、そうではないこの横手で、こういう人たちと20代の若者が一緒に作業をするということが、私は若い人たちがいい形で育つ方法、空間なんだと思って期待をしています。

要は、全世代が垣根なく、お互いに持ってる力を出し合い、協力協調して前に進む、同じ方向を向いて歩いていくという姿を少しずつ醸成することができれば、私はこの横手の未来は決して悲観するものではないというふうに確信を勝手にしております。

今、「歴史を受け継ぎ 磨き上げ 凛々しく羽ばたくまち よこて」という題材で第3次の総合計画を立ち上げるわけですが、この言葉には、大変長くなりましたけれども、今日お話したような内容が込められて、ここに私は行き着いたということでありまして、何となくこういう言葉を見い出したと思わないでくださいということで、みんなで頑張っていこうではございませんか。

どうぞよろしくお願い申し上げまして、私からのプレゼンに換えさせていただきたく存じます。ありがとうございました。

質疑応答

【会長】

ただいま高橋市長から、本日の意見交換に当たっての話題提供ということでお話をいただきました。大変厳しい状況ではありますが、横手市が向かうべき方向性について、非常に熱のこもった、市長のお気持ちが溢れるお話をしていただき、本当にありがとうございます。ただいまのお話の方向性を踏まえて、いろいろ皆様から今後のまちづくりについて忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

最初に事務局から説明がありましたように、前回の審議会までに基本構想の部分

までが固まっています。今後は基本計画の策定に移っていくわけですが、皆様からはそれぞれの専門のお立場でもいいですし、あるいは全体を見渡して、こういうところを重点的に進めていけばいいのではないかなというような視点で、ご自由に発言をいただければと思います。

なお、市長におかれましては委員同士のお話をお聞きいただきまして、市長のお考えがありましたら、適宜お話をいただければ大変ありがたいと思います。

【委員A】

普段仕事をしていると、将来は大丈夫なのかという話がよくありますが、市長のお話を聞くと、横手でも将来に希望を持てる部分はかなりあると思いました。私も仕事で大きくやっている農家さんとお話をするがありますが、本当に頑張られている方はいっぱいいらっしゃる、儲かるところは儲かるんだなと感じています。

そういった中で、どういったことに力を入れていけばいいかということですが、市長は産業振興には大変力を入れているようだし、教育に関しては私も様々な会議にお呼びいただくのですが、正直、横手の歴史にはあまり詳しくなく、そういったことも教育に入れていただきたいとも思いますし、また、人口減少はもうこの日本の流れということで、横手だけではどうしようもないところはあると思いますが、日本全国で誤差の範囲の中で争ってもしようがないとも思います。そういうところではなく、もっと広い視野を持っていろいろと取り組んでいければと思いますが、そういったことを市長はいろいろ考えているようだし、他の方々も多分いろいろとお考えになっていると思いますが、そういったところが今後の取り組みの中に入っていければ良いのではないかと思います。

【委員B】

感想の部分が多くなりますが、子どもを去年産みまして、ライフステージが変わっていくと自分が気になることも変わってくるということで、子供がいない時代は一切そうした少子化というところには、正直目がいていなかったのが事実です。ちょうど今年4月から全ての子どもの保育料が無償化されたということで、やはりそれを感じると嬉しく思い、横手市のそういった政策に本当に感謝したところであります。

でも、そういったような形で、自分のライフステージが変わる中での興味のあることということになってくるので、なかなか気づかないところや、横手市でやってくださっているのに耳に入っていないことなども結構ありますので、どこかキャッ

チーな部分で押し出していただくと、いろんな世帯に届くものもいっぱいあるのかなというふうに思っています。

また、子供の就職ですとか、いろいろとライフステージが変わっていく中で、一番近いのは、家族であったり親であったりすると思います。20代30代40代のお子さんがいるお母さんやお父さんが、一言「帰ってきてほしい」と言うのが、昔ながらのやり方ですが、やはり一番大きいのかなと思いますので、私自身も会社を経営する中で若い人に目を向けるのはもちろんですが、50代60代の方々がここにいて良かったと子どもに言えるような給料体系であったり、そういう生活を提供していくのが大事かなというふうに改めて思ったところであります。

【委員C】

今、私が一番興味のある分野は農業です。父から田んぼを引き継ぐことになり、本業にもお米は大変大事なものですので、そこを理解した上で継ごうと考えています。

実際に今困っていることは、農業の初心者が学べる場所がないということです。もっと若ければ学校に通ったりもできたかもしれませんが、それができていません。市に相談したところ、農業を学べる場所はあるけれども、例えば稼げる農業のためにお米以外のことを勉強するとか、そういうことができますという返答でした。

父も高齢であり、父について習うことができるのがあと何年あるかわかりません。全くの素人の、若くない者が農業を学べる場が地域にあるというのが私の一番の希望です。先進的農業への支援もとても大事だとは思いますが、もうちょっと根本の、そもそも農業をするっていうところを勇気づけてくれるようなことがこれからの計画になればありがたいなと思いました。

【委員D】

子どもたちには、実際に自分たちの目でいろんなことを体験して、自分の目で見て感じたことを大切にしてほしいと思いますし、そうした施策を大事にしてほしいと思います。

そう思った理由の一つ目ですが、田んぼの水はどこから来るのかということで、農家であったり、この辺に住んでる私たちにしてみれば普通にわかることですが、水不足であったりこのような天候の中で、どのように稲が育って米が取れているのかわからない方が結構いるということが仕事を通じてわかりました。そういった知らないことを知るということは恥ずかしいことではなくて、ではどうなのか、どう

すればそういうふうになるのかというところを実際に知る機会を作ってもらえたらいいなと思います。実際に田んぼの水がどこから来るのか見学しに行った学校が2校あるということを聞きました。すごく良い取り組みだと思います。実際に目で見ることによって、私たちの生活の中で必要だと思うこと、なおかつ、実際には当たり前のようにその目の前にあるものが、先人が難儀して難儀して、水がここまで流れてくるように作り上げたからこそできていることだということを知って欲しいと思ったからです。

もう一つ、先日大雄の阿気地域で行われているか鹿島行事を見てきました。自分の町内で行われている行事は見たことがありましたが、他の地域で行われているそういった伝統を伝えるものについて参加することで、他と比べての自分たちの地域の豊かさであったり、他の地域の魅力がわかることがわかりました。ぜひそういった体験であったり、積極的に他の地域に行って知ることを大事にしてほしいと思います。

【委員E】

不動産業と設計事務所を営んでおりますが、まちづくりの中で気になっていることがあります。それは、20年前の市町村合併時に全区域を都市計画地域に指定し、網をかけたため、これから家を改築しようとか、リフォームしようとかいうときに、前面道路があるかないかが重要になってきます。前面道路が4m以上あって、さらに2m以上の接地がないと、そこは確認申請が出せません。出せないということは改築したりできないということで、その土地には価値を見出せなくなります。こういう問題がすごく多く、空き家問題は横手市でもすごく問題になっておりますが、そういうところを考えると、どうして20年前に網をかけたのかちょっとその辺の事情はわかりませんが、難しいかもしれませんが見直すべき問題ではないかと感じています。

コンパクトシティは国の政策で、全国的にコンパクトシティ化しようということで何年も前からやっているのですが、駅前開発など、公共施設のインフラとかはすごく便利になって、重要だとは思いますが、そうした場所から離れた、いわゆる旧町村の空き家系の問題もあります。これから実家へ帰ってきて建てるにしても実は建て替えることができないという場合が多々ありますので、その辺はぜひ見直すことができれば検討をお願いしたいと思います。

【委員F】

私は農業に従事しておりますが、農業の問題はやはり高齢化であろうと思っています。法人化や集約などにより大きくなってはいるのですが、法人の中でもやっぱり高齢化が問題となっています。でも、ここ最近、農業もだいぶ儲かるようになってきて、新規参入の方も増えてきました。JAと行政が一体となってやっている地域は横手ぐらいだという話をよく聞いています。今回の渇水対策など、いろんな問題が出たときに、その都度臨機応変にやってもらえるというのがありがたいことだと思っていますので、今後ともJAと行政が一体となって問題に取り組んでいってもらいたいと思います。

【委員G】

市長の思いを受けまして、私も60、65歳を過ぎても働けるように、戦力になれるように頑張っていきたいと思います。自分の子どもは2人おりますが、残念ながら県外に出てしまいました。でもいずれは帰ってきたいという思いで出ていきました。修行するつもりで頑張ってきたという話をしていますので、何年後になるかわかりませんが、そのときに魅力ある横手市になっていられるよう、自分も頑張っていきたいと思います。

【委員H】

不登校の話が心に響きました。不登校の子がいますと、最初のうちは仕事を休んで子どもの様子を見てという生活ですが、それだと働けず、収入も得られないので生活も苦しく、やむを得ず子どもを家に置いていくしかないという選択になります。

不登校で一番しんどいのは、学校に行きたいという思いはあるけれども、それを本人に押し付けることがなかなかできないという部分だと思います。本人は、頑張って学校へ行こうとしたけれど行けない、行けなくなったという部分があり、頑張る力が出てこなくて、体と心を休めながら、また回復していこうという気持ちになるのを待つという状況だからです。

ただ、家で学習に向かうかとなるとなかなか向かえない環境もあります。学んでいないから、たまに学校へ行こうと思ってもそれまでの蓄積がないので、やっぱり教室に入っていけない。みんなが知ってることを自分がわからないという部分に不安があって登校が遠のくってというような悪循環というか、そういう繰り返しで学校に行けなくなってしまうと思います。

そういうときのために、スペース・イオさんであったり、かがやき教室であった

り、いろんな対応をしてくださるところがあるわけですが、なかなか本人と合わず、やっぱり家にいるという選択になるお子さんも多いようです。学校によらない学びの機会といいますか、学びだけでなくでもいいんですが、どうしても日中、家族がみんな外に出てしまうと戻ってくるまでの10時間近く、1人でずっと過ごすことになりますので、外との繋がりがなくなってしまう部分が心配でもあります。

まず登校ありきで考えずに、何か機会があれば外に連れ出してっていうことも大切で、勉強に特化して過ごす場だけでなく、例えばその本人の興味のあることをフォローしながらサポートしてくださるという機関が民間ではありますが、公的な部分ではありません。通わせたいと思っても費用面の負担が大きく、それこそ自己責任みたいな感じになってしまいます。十分に働きに出られない上に、子どものために環境を整えようとするすると費用面で負担が出てくるという、すごい悪循環が続いてしまう部分がありますので、公的なフォローがもう少しあると、選択肢がいろいろ広がるのではないかと思います。学びだけではなく、繋がりが持てるような支援システムがあるといいなと感じています。

【委員 I】

私自身、月1回ではありますが、十文字中学校の学校に行けていないお子さんたちの第3の居場所作りの活動を仲間と行っていますが、実際に来る子どもはいません。なんでかなと思ったら、保護者の方がお勤めされていて、その場に来る足がありません。そもそもそこに行けるくらいだったら、保健室登校などができているということです。ですので、第3の居場所作りっていうのは活動して1年以上になるんですが、毎月やっていて、来てくれたのは今まで1人です。保護者の方と一緒に来てくださったんですが、それだけ外に出るっていうことが難しい環境と、あとお子さんたちの気持ちですね。やっぱり1人1人違うっていうのはもうまさに本当にその通りで、1回来たからOKとかではなくて、それを継続して来てもらうっていうのがすごく難しいなっていうのをとても感じました。

今の子どもたちは、何かわからないことがあったら携帯で検索したり、ChatGPTに聞いてみたりします。ですので回答はすぐ出てきますが、失敗する経験がすごく少ないのではないかと思います。社会に出たときに自分の思うようにいかない部分というのはいっぱいあり、「これは私の考えていたことではなかったの、もうやめよう。」みたいな感じで、駄目だったらもうそこで諦めちゃうみたいな感じがあるように思います。次にまた新しいのがあるからいいやみたいなところがあるのかもしれないませんが、今の65歳以上の方々というのはそうではなかったんじゃないかと

思います。うちの父は 70 前半ですが、今もバリバリ現役で働いており、学ぶ部分はとても多いです。それと同時に私は何が心配かという、父や母が年を重ねていくにつれて、いわゆる介護問題が出てきますが、そういったときに安心して過ごせる場所であってほしいと思います。30 代 40 代の人たちが実家に戻ってきて、いずれ年老いていく親の介護とか、そういう部分の負担というか、そういう部分もやっぱり気になってくるのではないかと思います。私としてはインクルーシブな社会であってほしいという思いがあり、インクルーシブは障害のある人たちだけにやさしいものではなく、年配の人、健常の方、全てにおいて優しい社会であるという場なので、秋田県内で唯一横手市だけはそういうところがすごく特化してるよみたいなのがあればいいのではないかと感じています。

【委員 J】

今年は暑い日がずっと続いています。去年は大雨被害が場所によって起こるなど、いろいろな被害が農業でもあります。農業者同士で話をすると、災害へのケアはすごくしてもらっていますが、ニュースにならないような変な気候がじわじわじわじわ農家の経済を圧迫してるという実情があったりもします。今後 10 年 20 年で改善することはないと思いますし、もっと極端になる可能性だってありますので、予測できないかもしれませんがある程度予測しつつ、農家によっても違うので線引きも難しいとは思いますが、じわじわ追い詰められていくような昨今の気象に、どうにか対応できるような政策があったらいいなと常日頃思っています。

もう一点ですが、県内出身で県外の大学に進んだ大学生の子や、他県の中学生の農業体験の受け入れなどもしており、若い人と話す機会も多いのですが、10 人に 1 人ぐらいは「食に興味がある」「生き物や自然に興味がある」「農業に興味がある」という子がいて、そういう人には私も横手に来てみなよと声をかけたりするのですが、そういうのを軽く言ってそれが実現できるような市になっていけばいいのかなと思います。

【委員 K】

私も農業をやっており、今年で新規就農してから 3 年目ですが、横手市の園芸振興拠点センターで勉強してからの就農ということで、本当に横手市は農業への支援が手厚くて、すごくいつもありがたいなと思っています。去年の大雨の際も市単独の事業で補助金を出していただき、大変助かっているところです。ですが、新規就農してみて、生活していくのが本当にいっぱいいっぱいというか、厳しい状況が続

いています。毎年の気候の変化もありますが、資材が全て高騰しており、新規就農者は国から3年間にわたって生活費として補助が出るんですが、私たちの3個上の先輩たちは5年間の補助が出ていましたが、私たちの1個上から3年間に縮小されているという現状があり、もう2年、何とかならないかなと思っています。私の代は、研修中にちょうど資材高騰という波に当たっており、機材や機械が買えないということで作物を変更した方もいますし、これでは就農できないということで、上にも下にも研修を辞めていった方もいます。せっかく就農したいという気持ちで研修まで受けたのに、思ったようにならなかったという現状がすごく悲しいです。

私はどういう人が就農できるかというと、親が農業を既にやっている、畑や田んぼを持っている、機械もあるっていう状況でないと、新規就農は難しいと思います。横手市は新規就農者を毎年40人以上輩出しているということですが、本当に新規で、自分たちで農業を始めるのが10人いかないぐらいであり、残りは全部雇用就農という形だそうです。もうちょっと、自分で農業を始めたいという人がずっと始められるような、特に我が家は果樹もやっていますが、果樹を本当にゼロから始めようとする、物が取れるまでに3~5年かかります。その間の生活が本当に成り立たないっていう状況にあります。そこをやっぱり果樹の産地として、これから盛り上げていくためには、そこをカバーする補助をいただけないかなと思っていますところ。

また、法人化やスマート農業など、大規模農業化が叫ばれておりますが、果樹は機械化が難しいということもありますし、園芸作物もそうなんですが、個人の農家が自分たちでできる範囲でやって、それで十分に収入を得られるような、その個人の農家が生き残れるような社会にしていきたいと思います。

もう一点、昨今クマの出没があり、私は農業委員会の農地最適化推進委員もやっていますが、やはりクマが出てくるといのは遊休農地や耕作放棄地が増えてるという現状があります。現地を見に行くと耕作できる状態でないというところもありますが、クマとの共生や農地の集約化、また、人が減っていくということを見越し、どうやって農地を残しつつ生きていったらいいかというところの解決策を探していきたいと思っています。

最後に、農業に興味がある人や、自分の食というものに興味を持っている人が増えていると感じています。ですので、職として学ぶのではなく、もっと大人が気軽に学べる場といいますか、農業と一般市民の垣根のない場所作り・体験作りみたいなそういう場所があったらいいかなと思っています。

【会長】

皆様、大変ありがとうございました。それぞれの立場から、非常に具体的な、参考になるお話を聞くことができまして、今後の基本計画の策定にとっても役立つ内容だったのではないかと思います。

たくさんのお話をいただきましたが、市長からも何かお話をしておきたいということもあろうかと思いますので、お願いします。

【市長】

縷々ご発言、ご提言、また懸念や期待も含めてご意見を頂戴いたしました。貴重なご意見だったと全て受け止めて、まずは感謝をいたしたいと思っています。また、思っていらっしゃることが、まさに横手の風土からにじみ出たリアルなご意見だったということで、金太郎飴的な、各自治体の諮問会議の中から通常、教科書的に出てくるであろうという意見からはちょっとずれて、横手ふうの、リアルな生々しい課題ということで、これは非常に良い生きたご提言だったので、しっかり落とし込む努力をしていかないといけないなど、全てのご意見に対して思ったところであります。

田園都市ということで私からお話ししましたが、基幹産業が農業で、半分が山林、そして宅地以外は農地というような横手ですので、この横手の地勢といたしますか、地政学的な利点とデメリットをしっかりとみんなが理解をし、今以上に良くするように知恵を出していくべきであるというのが、まずは大雑把な回答となります。

全体的に農業系の話題が非常に多かったと思います。ざっと、まずはお話させていただきたいと思いますが、大規模化や先進化という農業形態は狙っていくべきものと思っておりますが、そのみでこの農地を全て網羅できるかということと全くそうは思っておりませんで、様々な形態の農家の生き方を横手は支えていくという方針です。

国は集積を推進しておりますが、そこに該当しない農家も横手にはたくさんおります。他の自治体と比べてどうこうというわけではりませんが、他の自治体はやっぱり国の方針に沿った形のみの支援というところが多いのではないのでしょうか。多分感じてくださっているとは思いますが、横手は国の方針から漏れている部分もやろうという姿勢は示そうとしていますし、全てかゆいところに手が届いてるわけではないことも承知しておりますが、今後も様々な農家の方の奮闘努力と、こういった立場の農家の方もしっかりと暮らしていけるという状態は何とか応援していきたい

と思っています。ただ、実際に現実問題として「淘汰」というものもありますので、そこから卒業される方々の土地を遊休地のまま放置というわけにもいきませんので、そこはしっかり橋渡しをしながら、全ての農地が今後もしっかり耕作地として役目を果たせるように、引き続き努力してまいりたい、応援してまいりたいと思います。

また、農家以外の方に農業への興味を持っていただくということは、本当に大切なことであると思います。まさに今回の米価に対する問題がありましたが、消費者は安い方がいい、生産者は高いと助かるという話でして、国民の中で農家は少数で、大多数は消費者ということで、民主主義の審判を受けると生産者の意見は少数派です。まず、大多数の消費者受けをする方向に政治は通常舵を切ります。というか切らざるを得ません。でも、我々は生産基地ですし、基幹産業が農業であり、この状況を何とか守っていかないといけないという立場ですので、そういった意味では横手市においては農家以外の方にも農業へ関心を持ってもらうというのは非常に大切なことです。農業に無頓着というか無関心であると、災害など、何らかの農家が困難をきたすようなときに、税金を使って補助をするということに難色を示す人が出てきます。やっぱり農業の大事さを理解してもらわないと、もっと集積が進み、経営体が減れば減るほど、農業に関わりのない人たちの人口比率は拡大するので、そうすると農業が困ったときに行政が支援の手を差し伸べるというときに、関係のない人たちの理解を得るのが難しくなってしまいます。

つきましては、私は農業に関係のない人たちにも、農業の大事さを、またこの価値というものを、また興味というものも知っていただいて、そして消費者一般の方々にも、横手の農業に対しては応援者であってもらいたいという前提を作り続けないと、実は農業を応援するというのは政治家としてはリスクがあるっていうことなんです。そうじゃない立場の人が大多数なので。ですので、そこは生産基地の政治を預かる身として、そうじゃない方々にその有用性というものを共有してもらうということを努力しないといけないと思っていますので、まさにその一般の人の学びということは非常に大事であると思っています。

次に、コンパクトシティのお話をいただきました。立地適正化計画というものを立てて、住んでももらいたい場所に居住誘導区域というものを設け、また用途地域という部分を設けてその土地の特性というものを色分けし、農地や商業地、工業地というように区域分けを行っております。中心市街地の横手駅周辺だけに集積できればそれで一丁上がりとは全く思っておらず、横手の場合はコンパクト&ネットワークということで、旧町村単位の拠点はやはり身近な生活圏として、かつての隆盛の

復活は厳しいかもしれませんが、生活の、また心のよりどころとしてのそのテリトリーというものはあると思いますので、がっかりしないような動きというのはやり続けたいといけないと思っています。

ご意見を頂戴しました、土地の利用の制限があるがために新築ができないという件ですが、法律の部分やルールの部分もあったりし、そのような事例があることは存じております。関連し、農地に農業者以外が家を建てるということもなかなか難しいことであり、農村はほぼそうなんですが、家庭菜園的に農地と宅地が一体となっている場所があります。農地がついていて一般の人は農地付きの住宅のところに手を出せないというそもそものがあったりし、農家でないとその土地を持てなくなっています。新たに放棄されてしまった家屋を新規で購入するときに、農家以外が入り込めないというのは農家を守るための制度ですが、今となってはそれも課題だということで、これは多分、そうでなくすればそうでなくしたなりの新たなメリットやデメリットが出てくるんだろうと思われ、じっくり議論していかなければいけないことと思います。

国の制度は、横浜の農家も秋田の農家も同じ法律になっていますので、それにより農業問題に対しての意見のちぐはぐがあったりします。横浜や川崎で農家といったらお金持ちです。なので、都市部の国会議員の農業者に対する見方が食い違っている部分があります。要は、本当は宅地で不動産開発するのですが、農家であると農地も買えるし、農地であると固定資産税も安いです。そして売るとなったらばつと宅地に変えて売るといふ、不動産業者より農家の方が不動産で儲かるというのが都会です。ですので、農業不動産みたいな超成金がいっぱいおり、その方々も農家というカテゴリーに入ってしまったいて、そういう人も含めて農業全体の法律を決めるから、なんだかおかしくなっちゃうということです。沖縄の農業も北海道の農業も違いますし、こういう過疎地域の都市のありようも大都市の都市のありようとは違います。でも、全部一つの法律の中でということで、なかなか完全無欠の制度に落とし込むということができてないということは、土地利用では常に付きまとう問題であります。空き家の解消の障壁になっているということは学ばさせていただいて、都市問題などの会議に出席する場合で発言ができる機会があれば、そういう問題が秋田にはありますということは、私の立場として訴えていかなければいけないなと思ったところであります。

次に、引きこもりの部分です。勉強が不向きな方もいれば、人それぞれであると思います。このくらい点数を取らないといけないとか、こういうふうカリキュラムをこなさないと立派な社会人としての体裁を保てないとか、何か固定化されたこ

うあらねばならないというものが不動のものとなってしまって、それから外れている子は駄目だとなると、これは生きづらいことと思います。

昔は手に職という部分で、料理人もいれば、彫刻家もいれば、陶器の絵付け師もいました。勉強が優れていれば社会に出ても大丈夫ということだけでなく、そうでなくてもいろんな活躍の仕方があるということを提案できるような社会にしないといけないと思っています。

江戸時代にもなかなか溶け込めない人がいたでしょうし、明治時代も大正時代も昭和時代もいたんだと思いますが、社会がその方々を吸収できていたんだと思います。多分、昔は引きこもりの方はあまりいなかったはずで、でも、昔からいたことは確かです。よく私が言うのは、天照大神も天岩戸に引きこもっていたということです。また、三年寝太郎の話もそうです。今に始まったことではなく、その時代ごとにいたんです。天照大神もうそうですが、三年寝太郎は立派に開拓をして、最終的には村の人たちを潤す活躍をするんですが、やっぱりその適材適所を社会が整えていくということが大切です。その子の特性というものを引き出すチャレンジの場、活躍の場というものを作ってあげるということも我々の役目であり、それこそ誰一人取り残さない社会に繋がっていくんだと思います。

必ずどなたも生きていく意味があって、価値があって存在しているので、その存在の価値を使い切るといいですか、やっぱりそういう方々の活躍の舞台、本領を発揮する舞台というか、価値をわかってもらえる舞台というのをどれだけ我々の世の中が作れるかというのも、新しい挑戦だと思っています。すぐには解決できないかと思いますが、絶対に目を背けずやっていきたいと思っています。

また、阿気の鹿島行事についてもまさにそうです。その行事一つ一つに意味があり、先人たちが何かの課題を乗り越えた証がそういうお祭りであったりします。鹿島様は厄除けですから疫病があっただと思えます。コロナみたいなことは昔もあって、でもワクチンというものはないので、多分鹿島送りだったのかもしれませんが。そういった形で我々と同じ苦労を先人たちはして、でも自分たちと同じ苦労は子や孫にはさせまいと思って、どの時代も苦労して次の世代にバトンタッチしたということが何百年も続いてきて、だから我々は便利な生活を送っています。

明らかに 50 年前の人よりは豊かな生活してるはずですが、だけれども今の現実が当たり前と思って、そこを基準に自分の人生を見ると、人より優れてない、人より遅れているので不幸だと比べてしまいますが、でも 100 年前の人と比べるとどうでしょうか。まず言えるのは、我々は全員、徳川家康よりもいい暮らしをしています。当時は電気もないですし、テレビ也没有せんから。徳川家康よりはどなたもいい

暮らしをしていますので、つきましては家康よりは幸せだと思っていただいて、そこもやっぱり心の持ちようなので、何でも前向きに物事を解釈するかしないかっていうことで、同じ事象を目の前にしてもネガティブに捉える人とポジティブに捉える人では違いますので、どうせだったら心の負担がないように、前向きに明るく捉えた方が幸せになりやすいのかなというふうにも思ったりもします。

全てに答えていないこともあるかもしれませんが、皆様方のご意見はしっかり記録させていただきましたので、それをしっかり踏まえて今後肉付けし、活用させていただきたいと思います。貴重なご意見、誠にありがとうございました。

【会長】

市長、大変ありがとうございました。それでは最後に、事務局から何か連絡事項がありましたらお願いします。

5. その他

事務局から

先ほどの意見交換では次期基本計画の方向性につながるたくさんの意見をいただき、ありがとうございました。次回の審議会では、基本計画の素案をお示しさせていただきます。9月24日水曜日の開催を予定しており、後日ご案内を差し上げますのでよろしくお願いします。

6. 閉会

以上